



日本人は、本当に幸せか？ 哲学を通じてこれからの生き方を探る。

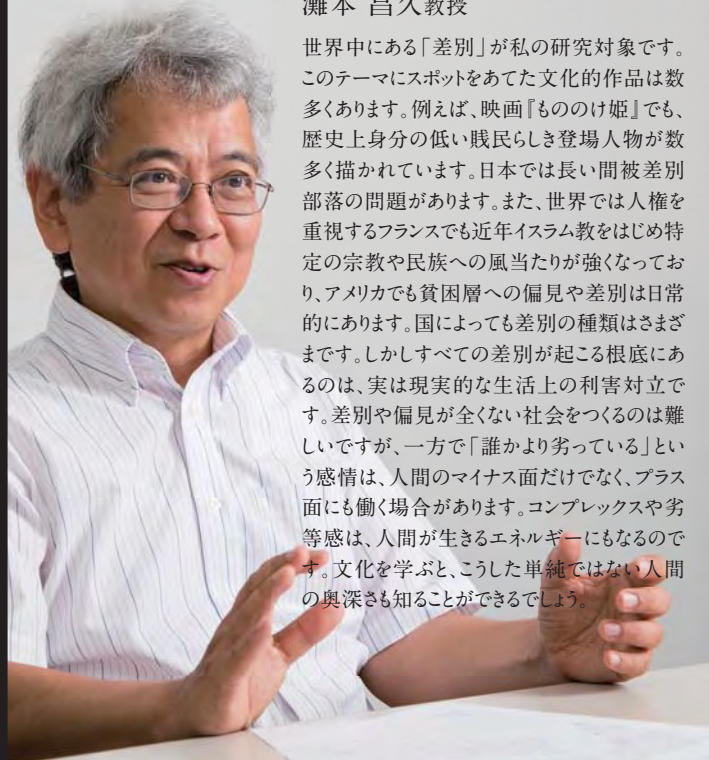
文化学部 国際文化学科 4年
山田 有紗さん

2年次にオーストラリアへ留学した時、時間がゆっくり流れ、お金を使わなくても家族が豊かに過ごす暮らしを経験しました。日本は先進的で、モノに満たされて便利ですが、仕事や時間に追われる毎日。「日本人は本当に幸せなんだろうか」と疑問を抱きました。それがきっかけで、哲学から「どうすればよりよく生きることができるのか」を考えています。私が研究しているのは、エーリッヒ・フロムというドイツ人の哲学者であり社会心理学者。彼は、モノや権力の所有が人生の目的ではないと説きます。そんな彼のシンプルだけど、心にささる言葉を通じて、日本の社会、さらには人々の心のあり方に迫りたいと考えています。彼の思想と向き合うために、英語版から読み解くことも。答えがないテーマを考える面白さ、多様な考えや価値観に触れる発見、そこに文化を学ぶ魅力があるのだと思います。

あらゆる社会に存在する 差別から、人間の奥深さを知る。

文化学部 国際文化学科 歴史文化コース
灘本 昌久教授

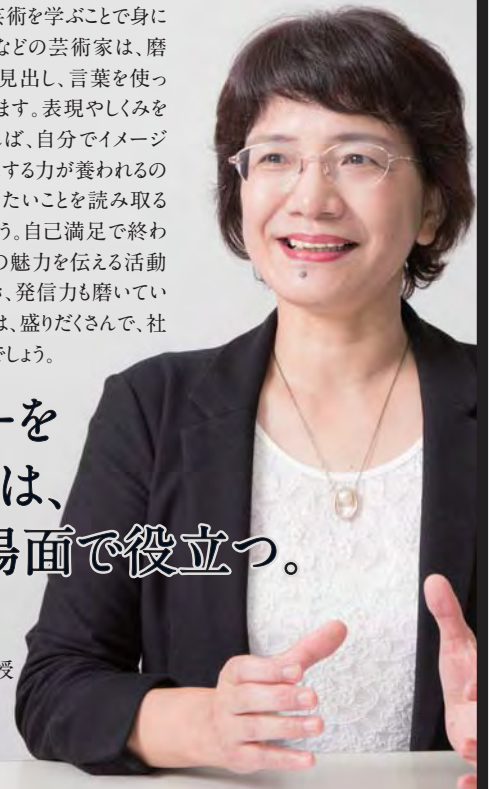
世界中にある「差別」が私の研究対象です。このテーマにスポットをあてた文化的作品は数多くあります。例えば、映画『もののけ姫』でも、歴史上身分の低い賤民らしき登場人物が数多く描かれています。日本では長い間被差別部落の問題があります。また、世界では人権を重視するフランスでも近年イスラム教をはじめ特定の宗教や民族への風当たりが強くなっており、アメリカでも貧困層への偏見や差別は日常的にあります。国によっても差別の種類はさまざまです。しかしすべての差別が起こる根底にあるのは、実は現実的な生活上の利害対立です。差別や偏見が全くない社会をつくるのは難しいですが、一方で「誰かより劣っている」という感情は、人間のマイナス面だけでなく、プラス面にも働く場合があります。コンプレックスや劣等感、人間が生きるエネルギーにもなるのです。文化を学ぶと、こうした単純ではない人間の奥深さも知ることができるでしょう。



地域社会を活性化する時、あるいはヒット商品を生み出す時、現代社会のあらゆる場面で真に共通して求められる能力とは何でしょうか。それは、人々の共感を呼ぶ「ストーリーをつくる力」です。それは、私の専門であるアメリカ文学のような芸術を学ぶことで身に付きます。作家や詩人などの芸術家は、磨かれた感性でテーマを見出し、言葉を使ってストーリーを編み出します。表現やしきみを含め、文学を探究すれば、自分でイメージし、そのイメージを言葉にする力が養われるのです。また、作者が伝えたいことを読み取る分析力も身に付くでしょう。自己満足で終わらないよう、ゼミ生は本の魅力を伝える活動にも参加して書評を書き、発信力も磨いています。文学で学べることは、盛りだくさんで、社会に出てからも役立つでしょう。

「ストーリーを つくる力」は、 あらゆる場面で役立つ。

文化学部 国際文化学科
文学・芸術文化コース
中西 佳世子准教授



世界を広げる文化学